

三國一夜物語

六

13
3021
6



13
3021
6

富土三國一夜物語卷之六

東都 曲亭馬琴著編

昭和九年七月一日 購求



第七編

赤間關の両妓標客と誼支

浅間左門將行の浪路が腸圃てあつてもその丈の風流さつたをまじひ。
その夜は赤間関の長が家に到つてうが子髪引く樓上このが花
のいあきぎ へんてあつたこと
主の熟妓ありやと問に照行答へくは是の今宵をいあて来つるものな
まの熟妓ありやと問に照行答へくは是の今宵をいあて来つるものな
外から見えればとまはれたるを来つるものなりは子髪引く樓上このが花
とてこの目して居多の菊燈臺に火と燈一鉢子に盃を添へて鮮の廣物
鮮の燈ののりをも鮮けりと清き磁器に盛りて携出所せしめておれ

富土三國

中

ながらく浩野に塵をたの葉をかきまわして白き赤た衣うち籠れ
 上は孔雀の尾よりもるやうのうしろ彩色なき絹箔の袷衣し遊行
 女まづおのり歩來て上坐に着ぬ照行背向にあまを見は浪路あり
 わくでその容止も二の町よりあり何とてその女の來つるからんと疑ひ
 ながら明白も回ひつねくうち黙つつらく見まは彼浪路あり似つ
 りあうもあうりて遊行女い盃を勧めくあはく酒をうけり朗詠を
 せらびくいとあうりう哥ひ感るに月い臆にさへ入ましく沖の白帆も
 さやうに見えうり春の餘波もをさうと照行のさかあきく寛
 酔を醒さそく軒檻の臂を持せ今宵の本意をと思ひしうりか餘
 つた堪らわく髪に對ひ蜜にりめままそこのま大人びるのた逢

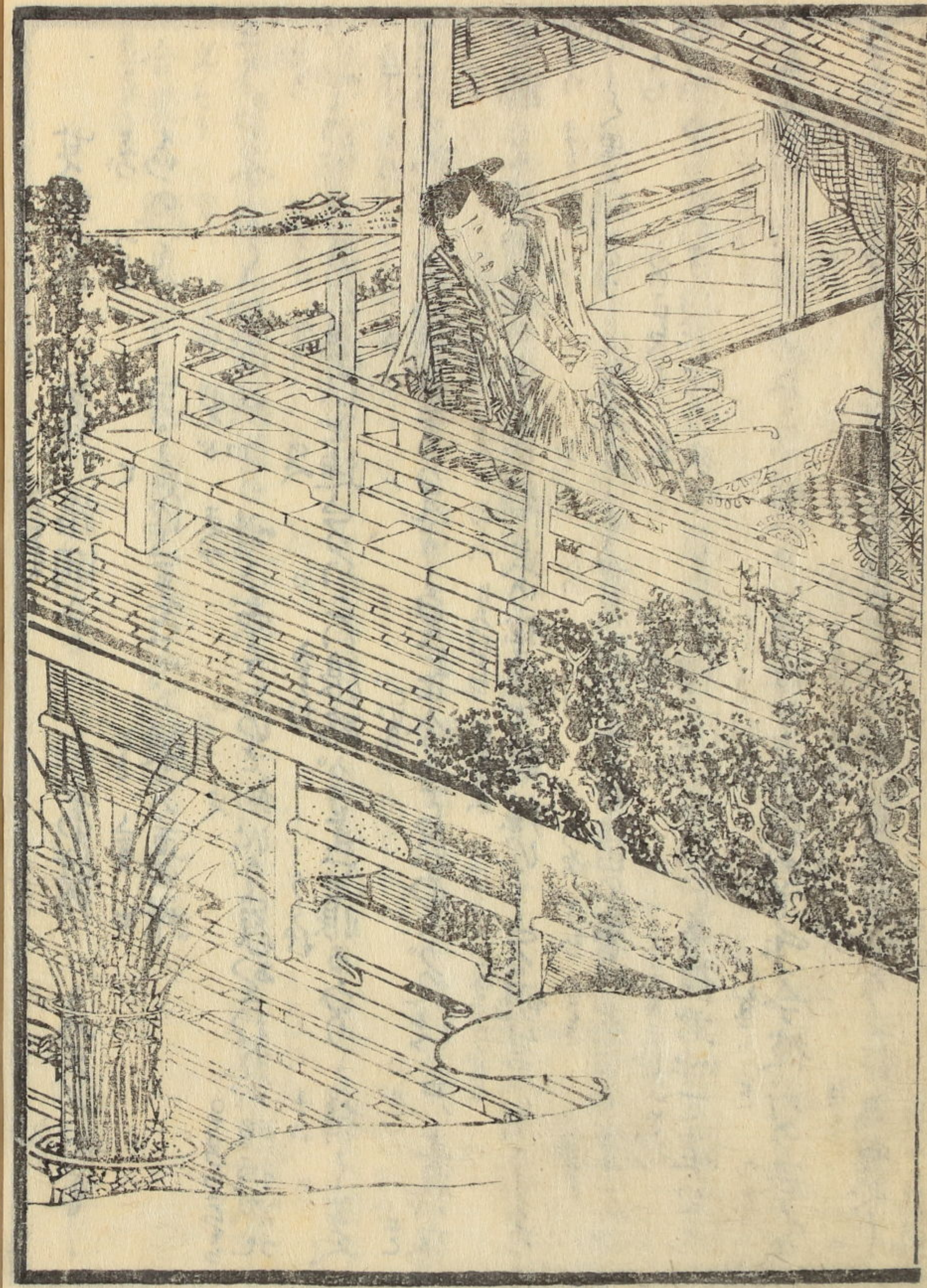
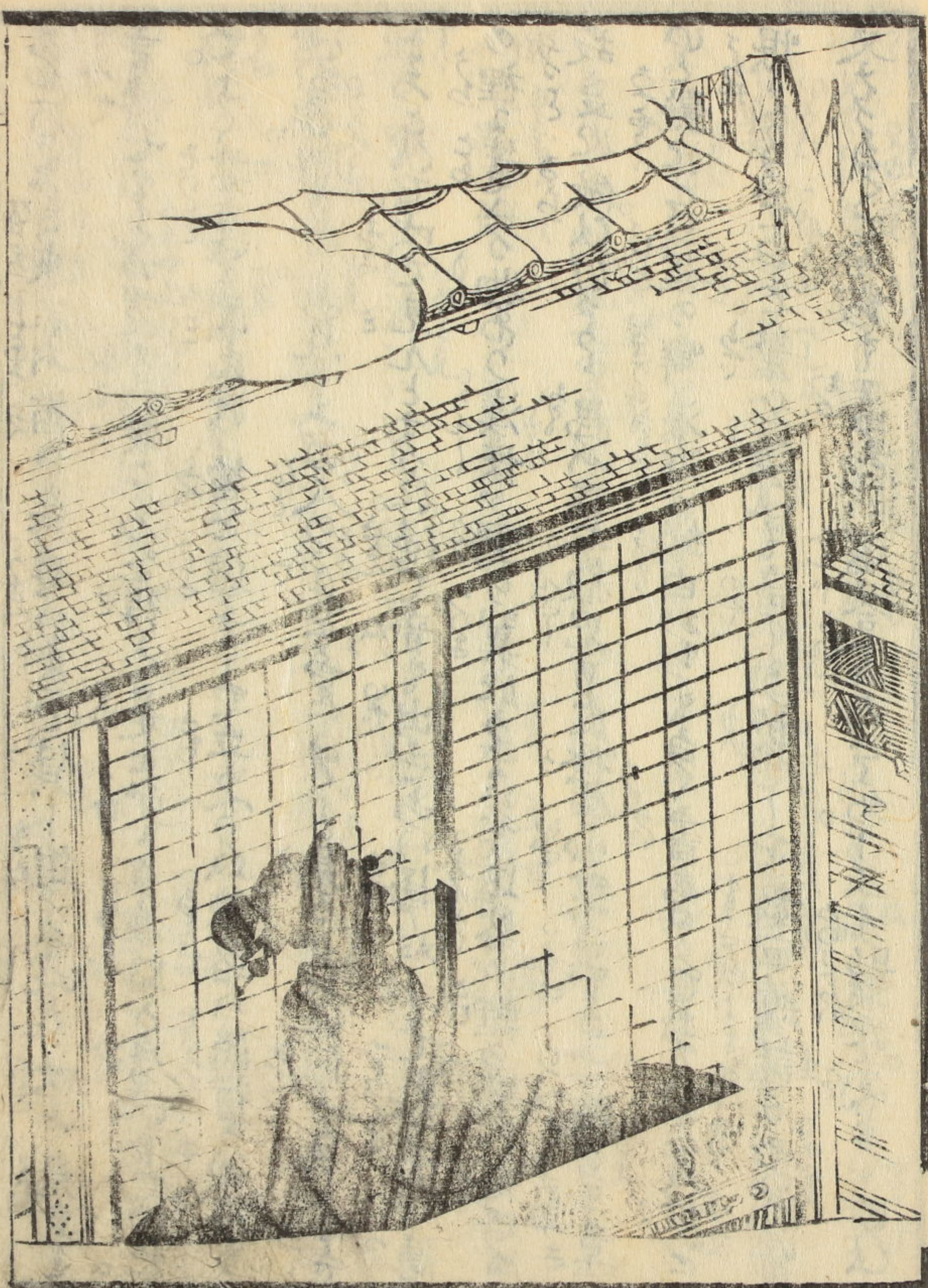
まや一もつた不意をとり行くと馳く老三板を撥く春風照行忙しく
 涼のく退し彼老三板と呼びのさうけいまの河まで浪路さう遊君と
 見これいそごとと思ひて來つた髪が聞くとあやゆらん五思入
 花あわくといふもなまらぐむとせむのりうらる故をそといひそめたく
 問は老三板賑然とうち笑ひて全く子ぎの聞のやまはさう侍りて
 浪江浪路と名なる君二人も侍りか浪江と姉と浪路と妹と
 定む今宵もあまの浪江の君より響に花主が浪路の會に宣ひし浪
 江と聞くとあまといひのまがやて見侍りてさういひて浪江のやうに往て
 額を合せ耳をうりうりてあやうさう又えの河へまうりてりあう花主の
 宣ひし言を彼君によく聞え侍りてあまといひて

つと浪路に會せしむるはひきと偶見えゆりつるは一夜のそひやも
 せどとらうく追遣らまはらんもいと面み殊更浪路より今宵客の
 すめりきく一夜のまげさうか方に宿とるうをらん聞えゆるとのと信
 だらていぬ照行も指船の固辞お難く流る身にも耻辱とまほさうと
 ぼか死つ物のと寂寥に見えくろ老三板いす髪よ命て照行と翠張の
 下に伴せ屋風建回してあひがまふく出さしけり浪江の老三板がめさうり
 ぼくまうくとなまへる強顔固の思ひに岸の柳の枝と遠く数ぬ
 風のよりもそのまに睡る照行と呼覚しとりのまうさうのたせのさ
 まひれ偏を生平とする遊行女の身ありまど一河の流を汲むもみ
 是他事縁と聞縦浪路にゆくと来るもま違ひさうが縁にーの

そかるとまひるうくまも暮ひまらするむとあはまて商さあまひのさう
 と眼と念と言葉と巧にさうとちけるもど照行もやびらつその夜に
 他まうく相語けるさ程お照行いさく浪路に會さるまの遺憾けれ
 次の日も又長が許お詰し浪江をま出逢しうが房に誘はんとま
 歎待まへくまもるがどくまもる照行其夜もひらさう黙止てあり
 とも寝にたり斯くさして不意も夜とくまねけり浪路に遺らざるは
 いあらねど浪江が志の又捨く死とらまわつて今その事とひも出
 らまて浪路にさう髪が物さうりさく照行がまとさうまのさう
 浪江さうさ折めらりひらひらさうさう思ひつと照行いさう客と
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

せむらうの思ひのこころは物妬しの袖の露湯とてなまを流す
 胸に火の残る間多して焚きあます六月の上旬をたもつひの
 ある夜の更なりし浪江の脱ぎかた客のそで其呼にゆたふ照
 行甲夜より徒然あるまはひより月光をうらめて懐より笛の音
 もかきあつて吹さらして影も又よるぞつゝりうま程に神籠る水
 中の吟いで雲を起すうとあやまれ江上の三弄赤壁に夢を雷も枕
 上の一声瑤臺の腸を断ちりうらこの時浪路のいく回も隔る笛の
 声とのま頭も照行の更をあのひびくは筑紫琴の操持してあや
 合奏し聴く声うちあびてうらまを聞か
 ち人のこころなむさむい川さるれの舟中

せられてい かの浪間
 あの月 琴の要の緒
 まうち入りく加茂類加の囀るあつくいと妙にうらむれ照行忽地
 にやたれま哥の思ひを迷くうらと浪路がうらと眼るうらと猜しあ
 の岸の船なぞで繋ぎあらるうらと今さらたわぐればくろんれが床
 に飾つくる螺蛸の書案は阿武の松原と時後にしる現管あつてうら
 忙しく黒塗榻ながしあや更に書つけとあやと笛の裏に巻くも掌ニッ
 四拍りあびる髪走り来てこころ待ちひらひら彼君呼て進らま
 うらび照行園でのらうら浪江が更にうら今彼野の琴を
 まくたいて妙の一定めて絃管の技の何とまうらと見君さる



言傳せりといひたる髪をうらみ得く是は受とり浪路が房にゆてゆた
 てよく其まを聞えはく笛と笛と遠よりと立ち入りの浪路の照行のむあり
 げなる贈りのあはれと人のこころをさすつと見るうらな何となく
 よろこびて吹て見んとするに絶て音も出どあは怪しやとて熟見の筒
 の裡に籠る物あり漢使が鷹の翼にうらを遠客が鯉の腹に寄る
 故まに做ひけるうら思ひにぞ叙思ひて掻きまき果して一編の玉草
 いと艶にたる程の癖浪江が縁由あちもく書あつとまなくぬ世と
 恨みたりぞらど筆の運びも奇しく物をとて数回續記りあはれに
 又さうりてうらも置まは還必書あつとあつと髪にまきくりひ

含めて彼笛を返りけり照行の更中もすたのいもあはれひたり燈は
 うら對く浪路が還答のうらとまら程に彼了髪笛をとり束つ止むに各
 ろひてあはれを吹のめを見せのさすまいとうましくゆるされど絃管の調は
 在りながら風流士の耳にあつとまらぬわが返り進らすつこの夏やさん
 為浪路の使としてこららあつとらりし果を退出ける折も夜の子四を
 過るあちなるに浪江のいりも酔い來す了髪も睡臥し物の黒白もあつと
 まら照行まら笛とまら筒の裏を見つた又艶筒を巻こめつこの行の
 裡にこそうらや姫のいりもあつとまらひりこらあつとらりし引出しと讀めあはれ
 くよろこび裳をまらを親浪路が房に潜行の浪路そのまを携て紅圍
 の中にけり過り阿弥陀寺のうらを候初に行のひまらををを訪らせ

のひらひらの程の一條ゆくまゝ侍らるる世の中のものなる端城
 も雲の爲に隔らば幸すも雨を帯ての逢ふもや君とえりし有らば
 八重結る他は女のまゝ夫がりのけおとも又妬しく思ひまじりしが彈が
 び引る琴の音と笛の調が蝶せし今宵のめをせとてまじけを幸ころが
 客も甲夜の程より入りし密に招き進らせしりゆ照行の只是仙女
 の窟に遊ぶうとわかれ浪江が頑物するもうらさけまど外がうら君の
 面影の見まわしに今日までの詰来しむじ互におまけと相語ふ折
 ちも紙格とて引あけつゝ足音高く走り來て二人の間に無字を坐する
 のよを見まわし浪江より照行大に狼狽て走り退んとするを浪江も驚く其
 裳を引ぎも浪路と見せりてあがり涙とてまじりか忍声より立てり

ち煙花にても密夫の殊更の成るるをばあよくはまてまわらな
 かりやうらむ容と寛どりて燈太も溢戯するものとあひくる。花
 玉も花まごうとららるる日來他人どらうり見ませ誠やのと會まわ
 せしをむつゝも竹と影護いながらまや縦りたる故ものま言そんた
 言葉のむらりし浪路とららるるに來り家公ふ訥聞えて汚れる
 顔を清うせん。おのまよたわらうりひ懲せど浪路いさげり。氣多きま
 度方が宣ふとらり理に似く理にあら元の花まららうらうら方へ來
 るひらあ言ひと幸にてもはも七寃よりものひららら後ら
 と聞ひとも幸來姉妹の契いともむらり耻辱を見せしまのゆを
 一言もひし語てまら顔にてあつらるり。

思ひめぐりて見ゆればさかたに如くあて在すべし。こゝろを
 せいのせよめ浪江のまじく声と高き。この口伶利もひつりて花
 のまじり客と。この證據やあつた。又そのまじり客が方へと来てま
 じり客と。その夜も聞えぬ。今うら月と経日とをねりてひつ
 り方(来)のまじり他へ女おひにあらまじり言耻るあそ浪路も今
 ひまじり互に柳の眉とあげ花の唇とひるふ。て争ふや。傍輩の遊
 君あに會合彼と寛め。と寛る声のまじりけまじり老三板團
 りて走つて來つ浪路と。ひひ懲り。さや言てひまじり夜もあけが家
 公に聞えて活き死。まじり目もまじり浪江の花主と伴ひ行て卧し
 る。まじり遊君まじり叙わ。けまじりあが圍に返さ浪江のまじり

照行を誘引てくぬ浪路ひひ。行未來。を思ふ。まじり
 一すぢり千行の涙ゆをせま。腰ま。と面を。死んともひ定ま。つ
 眼のまじり書讀む。まじり身ひひ。三ツの漏刻も。まじりま
 西へと入る月。まじり見ゆ。剃刀取。つ既に衝立んとする折。照
 行まじり看来て。この形勢。うち驚き走りよ。と抱き。まじり浪路縦
 まじり追ま。まじり一言も聞えず。とまじり死んともひひ。つ連も愛
 び。會ま。まじりあ。まじり走らん。為浪江。熟睡。まじりを窺ひ。彼野
 と。腹ま。まじりま。まじり行。まじり第。二條。まじり結。まじりひ。ま
 まじりま。まじりま。まじりま。まじりま。まじりま。まじりま。まじりま。ま
 此の曉の彼時追風に。纜と。たて播磨。赴く船の。まじり照行船

人に金ありくやらせ船底に屈居てあやうく鰐の口をのびし。夜も明
さるに二三十里落延く浪路もやうやくひらめく明のくまに照
行が單衣の袖懸く血に染るるさよふめて見て大あやうくまづ其
故を問に照行答へく。是は我が一言の情に引まらざるびあび行て斯
もせよとあやうひしと浪江をゆく猜けん彼つやく睡らざるまづ己ごとを
得と刺とらせしと声ひとめなく物ぐるに浪路忽地真らんと実語
虚言いひごちる浪江も花街の意持をましく他まき笑しとより捨
て走るまその人より見は二道うらなまとうらまんとするまづ活路の
あて
足もまらうらうらましく刺殺せし何るぞ縦との人の妻とわかるとも。
又他へ女にうらまて殺せさせんる男子とあやうまづしてこそ一生を誤

るるまと只管後悔しきまも今も花街すまらるるおあやうみる是
前世の悪縁をうらま思ひとえいしく身まどとらうまける。赤
間関の長が家いこの夜より照行が浪江を殺し浪路と將と奔し連
園宅沸がぶとく騒ぎし居多の追人と蒐これと夜わけと後とのるを
あやうまづその往方あるまうらう彼は日來何地に居るまといのま
楚とまらるるものまけまらうらまもせまづまき懸て浪江の後のまみど
営も思ふが此時よりぞと下め浪路と貞貞負のものも却て浪江をいひかき
あやう浪路と憎まける間話休憩照行浪路が乗し船は追風に真帆揚
て走りくまらに遙けき海上と二日まらるの乗つけて播州室津お敷泊
けまら照行船の浪路を残しまきひとり室積平馬を訪て委細あやう

うと物をうすすまの平馬圓く驟然とうち笑ひて是近曾長門小消息
 きて山島をよひ登りてくわひひにまづうら来のふこと幸のまことの故ハ
 この室津ハ西国渡海の要害として赤松の家臣武備のものの居多の
 士卒を領てとまを成るまづに此度とま不意この津の空正とまけのり
 たまへ東ハ完栗川とらなり西ハ赤穂の郡とらなり海陸の旅客等を改
 正とめて身の勢を縦富士太郎山島があつたのを知つて寃よるをも
 ちの津のあつた入の足踏もさすづきよりてこれ前日山島が為に鳩曾
 巖の麓に便宜の隠家と修理したるが卯原も其所に在すといふ案内
 までとまをく赴き更といひの照行の口官との志の浅うらまを感謝し
 ろとまび浦方に行くと浪路を伴ひ来つたまを平馬に引あせ三人相伴

鳩曾巖に到卯原に逢くと親子まるとまをよるまをびあまの浪路も卯
 原の名對面していと新とまをくとあけりかくて日も暮れまるとまを
 平馬の又とまを訪めといひてまの茅宅へ入り照行の門涼とまをせんとて瑞辺
 立ちつとまを見まへ門の下の高燈籠を掲出しそのまをを出居の柱に繫た
 まをまをまへ何の為かまるとまをまへ卯原の故と問へ卯原我子の耳
 に口をとせまをまへの富士太郎が人と相語て不意に押寄るまをまを
 ん時たらのまをを斬落して燈籠の火を消せば平馬とまをと暗号に居ま
 の士卒と將とまをと来つ若奴等を残つまをまをまをまをまをまを
 がるまを照行の口官との慮の浅うらまをを稱けるが浪路にいらく
 匿してまをのまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを
 浪路の遊行女に似けまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

いと信じて見えはるを卯原のものが曲まるゆりてとまをよとま
せぬ日と経るやうに物あはれづいていとましくうくりひ徴しけるを
第八回 三雲叢を打て雙言人に擬ま

富士太郎の故郷を去てより露に病り風に飢ゆる時八万里の波濤を
あが死又ある時の千丈の險阻と起雙言人照行を索るも既に二年に
及び四国九州残つとく経歴すといども時運のまじりてさるるや終
に環會がぞく播磨路にひのとまひとして今茲明德四年の秋の季ハ
山陽道にさらへり真金なく吉備の中山まで来にけりこの地方ハ備中
備前きの封疆るまの播磨へ遠くらすといへるに俄頃ハひあつ
たつて一足もすくひまおこらず忽地に目も腫れも消るをうとくして

路とゆたがて一息ひ絶え虫の咬るるにどろくも果お到つて病を来れ
ずといふ疫癘と見てけはる里人ホ忘怖まてりまませんといふゆめ
まろりの貪りたりのハ却と情深くまの里に馬と追ひてせどりて
主婦ありてあつて富士太郎が旅ゆく病とありと廢に隣てまあ
空室ありてあつた拂ひ延布まして其野に病一か死主婦うらむぐ
湯と運び病とありて来てまぬまど富士太郎の病日なると劇くとち死
づかむへいふ終に病志を遂げして道路に死せん夏の朽やぐ故々の
夏も思ひまに今宵なりの別ともあつてや人のいふまをまらんと
人の縁や一の奇くすまのま主婦が誠むをうとくま今うらや頼すま
けはるまをま告て津國の母や妻に一言ひい置まて思折る

主の丈一個の旅人と馬に乗せ東の街へ過る。とく。家りくなら。時
 難の断り。とく。と見て大。敵身。た。待。更。鞍。と置。る。や。進。り。す
 了。彼。野。の。か。家。之。裡。に。憩。ひ。る。ま。ど。り。ひ。つ。馬。を。門。に。牽。き。お。く。旅
 人。中。で。下。さ。ら。つ。搦。頬。に。尻。う。け。く。厩。の。方。を。見。入。り。ま。は。病。卧。の。人。お。け。り
 ま。は。旅。人。の。心。食。り。と。熟。視。す。に。ま。か。う。づ。う。も。あ。ぬ。日。か。古。主。の。り。け。ま。が
 う。ち。移。る。に。枕。方。に。ま。よ。り。の。に。郎。君。さ。ぞ。と。こ。に。病。を。お。す。を。回。り。富
 士。太。郎。も。即。か。が。ら。その。人。を。見。ま。は。元。日。家。の。奴。隸。より。彼。の。父。右。門。が。撃
 ち。て。夜。警。人。浅。間。と。見。と。ま。く。走。り。う。り。さ。こ。び。富。士。太。郎。に。従。ひ。て。合
 法。御。衝。に。到。り。主。の。死。骸。を。昇。り。て。來。ま。る。もの。に。と。い。と。信。守。る。男。の
 ま。は。富。士。太。郎。墨。江。を。引。退。く。日。奴。婢。に。お。も。身。の。服。と。ら。せ。つ。る。中

中。の。に。た。を。と。添。て。遺。物。を。と。敷。多。子。が。い。く。程。ま。な。く。浴。に。上。つ。と。由。緒
 ある。人。に。は。つ。と。聞。こ。る。に。今。思。ひ。ま。は。げ。あ。は。く。あ。ま。の。ま。づ。う。れ。い。と。
 苦。し。氣。に。頭。を。撞。つ。い。か。う。う。か。病。着。既。に。危。く。露。命。且。夕。に。追。身。の。汝。浴
 に。上。ら。い。定。め。津。の。國。を。過。る。て。わ。が。つ。い。か。家。に。立。上。り。て。櫻。子。に。言。傳。へ
 せ。よ。只。ま。へ。言。つ。討。お。と。死。す。る。ま。迷。ひ。の。一。つ。り。浴。の。富。士。も。曇。ら。げ。い。か
 志。を。嗣。せ。と。傳。へ。し。と。い。か。身。の。下。さ。り。奴。隸。の。形。勢。を。見。て。只。願。嘆
 息。す。世。の。薄。命。さ。る。人。の。ま。ど。斯。も。も。果。敢。る。た。ま。あ。の。わ。が。僕。此。度。周
 防。の。山。口。使。せ。し。と。い。か。言。は。れ。る。う。り。浅。澤。へ。立。上。り。て。ま。の。ま。を。告。げ。ま。へ。し
 但。し。證。据。な。く。疑。や。あ。り。ん。一。筆。書。つ。け。る。と。い。か。富。士。太。郎。又。い。か。う
 病。劇。け。ま。は。筆。と。る。ま。も。な。く。づ。と。の。行。囊。の。裡。か。る。刀。の。掃。技。を。り。て

ゆが様子も見むやもの。いまだ母の聞ひ。とて多量とるらん。あ
 ちく。困へし。あつせ。いよく。困え。ま。い。た。奴隷。い。ま。う。と。得
 彼掃枝を技とて懐に挟。うら。養ひ。て。思ひ。入。り。ひ。つ。涙。死
 拭ひく。馬に。うち。架。ま。主の。犬。絆。繩。と。り。て。牽。出。東。と。て。走。去
 け。富。士。太。郎。の。今。と。も。を。要。け。と。あ。ら。わ。く。只。臨。終。と。ま。ら。な。う。り。た。
 次。の。日。も。熱。氣。忽。地。と。り。く。飯。粒。も。味。を。覚。え。僅。五。日。を。う。り。た。と。全。く
 本。復。あ。ら。う。け。ま。い。あ。く。歡。び。時。の。路。費。と。ら。う。ち。て。あ。の。ど。丈。婦。に。報
 ひ。懸。く。播。磨。路。に。赴。く。思。ひ。あ。う。り。あ。る。年。多。田。の。神。美。と。れ
 に。教。く。汝。二。度。の。厄。難。あり。九。ん。と。飲。せ。が。必。ま。ん。と。宣。ひ。し。ゆ。い。ま。と。て
 思。ひ。合。す。る。ま。い。こ。ま。先。に。い。た。と。も。生。う。と。思。ひ。定。め。故。郷。言。告。せ。

次の日。心。清。く。く。な。り。て。危。く。命。を。ひ。ひ。ひ。と。奇。く。あ。ら。う。る。
 様。子。も。見。む。や。もの。と。い。た。母。の。聞。ひ。と。て。多。量。と。る。らん。あ
 ち。く。困。へ。し。あ。つ。せ。い。よ。く。困。え。ま。い。た。奴。隷。い。ま。う。と。得
 彼。掃。枝。を。技。と。て。懐。に。挟。う。ら。養。ひ。て。思。ひ。入。り。ひ。つ。涙。死
 拭。ひ。く。馬。に。う。ち。架。ま。主。の。犬。絆。繩。と。り。て。牽。出。東。と。て。走。去
 け。富。士。太。郎。の。今。と。も。を。要。け。と。あ。ら。わ。く。只。臨。終。と。ま。ら。な。う。り。た。
 次。の。日。も。熱。氣。忽。地。と。り。く。飯。粒。も。味。を。覚。え。僅。五。日。を。う。り。た。と。全。く
 本。復。あ。ら。う。け。ま。い。あ。く。歡。び。時。の。路。費。と。ら。う。ち。て。あ。の。ど。丈。婦。に。報
 ひ。懸。く。播。磨。路。に。赴。く。思。ひ。あ。う。り。あ。る。年。多。田。の。神。美。と。れ
 に。教。く。汝。二。度。の。厄。難。あり。九。ん。と。飲。せ。が。必。ま。ん。と。宣。ひ。し。ゆ。い。ま。と。て
 思。ひ。合。す。る。ま。い。こ。ま。先。に。い。た。と。も。生。う。と。思。ひ。定。め。故。郷。言。告。せ。

着に食もすまじ様子よくと息を惹いて見のまの対りり医療
 首病れを賜は信守の勤に進らせり活牙の十月の上旬元召仕
 りの双隸が周防より入るころと思ひもけり訪ひ來り富士太郎
 吉備の中止にありて病危とよと告て彼掃技を遠よりしりし
 吉記つとれはく飯こくは様子の絶も入るべりなるに打たる死
 一欄然とてありけりがかくかくむとむむむむ三雲が假寐を
 覗に熟睡もくもむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 涙をくろ落して止んとするに止まらず翼もくく東の向ふはま
 まわいけきど姑の病と在すともくく又むむむむむむむむむむ
 死と思ひを焦す折しも三雲がむむむむむむむむむむむむむむ

高きれむむむむむむむ。又と拍まむむむむ乳を銜すは三雲も孫は泣声か
 覚けん沈るあつて起出く様子が涙をくくくくくくくくくくくくくくくく
 去来よりの物もひひの毎にもろり勝つともくくくくくくくくくくくく
 かのた女子程世にひひのためりもろり照行のむむむむむむむむむむむむ
 にも男の仇のまどまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 足半もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 なく吾身も長ちりひひのたけむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 に秘はれく高き幸の太鼓をのて來るむむむむむむむむむむむむむむむ
 悲しくくくく太鼓をのり出いらく重びあうた居るが三雲の近く鼓を

つ。抱りぬがら。も。あ。く。や。孫子。聞。入。の。太鼓。の。因。多。り。て。祖父。
右京進知親。思ひ。て。身。ま。り。の。ひ。ま。も。ま。も。撃。れ。る。み。
只。う。ら。や。た。た。太鼓。の。ま。の。敵。入。り。と。あ。り。眼。の。太鼓。を。も。り。身。の。
ま。に。埋。む。も。彼。會。替。の。寛。を。雪。ゆ。越。王。の。鼓。も。高。く。見。の。名。を。揚。ん。
持。る。抱。と。劍。と。定。め。て。や。責。鼓。お。が。の。音。も。鼓。と。修。羅。の。太鼓。も。
あ。ら。ぬ。ゆ。ら。あ。ら。ぬ。や。抱。投。す。て。の。と。完。然。に。見。え。し。孫。子。の。折。
よ。も。母。に。對。し。言。中。う。け。い。は。な。く。頭。を。も。り。よ。げ。の。見。え。の。ま。ら。
く。今。も。住。吉。も。あ。ら。ぬ。を。の。孫。に。あ。り。果。然。と。ま。を。祈。り。は。る。や。い。
宮。居。正。の。も。り。ま。に。給。ま。り。毎。日。も。得。請。さ。る。本。意。を。侍。
と。り。三。雲。も。點。頭。く。よ。ま。ら。な。る。ひ。を。か。ん。て。ら。の。よ。れ。く。

孫子。い。は。子。を。抱。し。直。に。住。吉。一。事。請。し。て。ま。づ。と。め。に。姑。の。平。愈。を。祈。
又。夫。の。命。數。限。り。の。ゆ。え。あ。ら。ぬ。か。ら。い。と。死。し。と。ら。ん。お。の。孫。子。が。命。
と。編。め。く。の。病。難。を。救。ひ。も。と。一。か。た。祈。請。し。瑞。籬。の。も。り。の。行。
つ。の。つ。百。度。の。も。と。運。び。し。程。に。思。ひ。の。外。日。も。聞。の。り。ま。と。姑。の。侍。
お。の。み。ら。ぬ。も。つ。と。死。し。く。走。り。あ。ら。ぬ。三。雲。の。屏。風。建。ま。り。て。再。び。
即。し。て。あ。ら。ぬ。孫。子。が。只。今。返。の。侍。り。と。ゆ。い。つ。ゆ。ま。ら。屏。風。と。の。道。を。見。
ま。の。三。雲。の。自。害。し。て。鮮。血。を。塗。ま。り。用。て。ま。の。障。を。あ。ら。ぬ。驚。き。の。敵。太。
郎。を。撲。地。と。投。捨。ま。か。骸。を。り。起。せ。の。喉。の。あ。り。と。短。刀。の。も。り。思。ひ。の。た。
割。断。し。ま。の。今。の。医。藥。も。も。の。あ。ら。ぬ。浅。ま。り。も。悲。し。く。も。思。ひ。迫。と。
涙。も。出。ぬ。善。惡。の。ま。の。け。の。ま。と。雄。と。た。女。子。を。あ。ら。ぬ。

讀みし心と猛り三雲が枕方にゆりける一封の遺書をおひらきて

富士太郎吉備の中山はく病危と告來る行の息の内に

あつまるくもす夏母もひら思ひにそりよまど吾身勲の絆

あつまるくは身も志と空しくり長別里ともあつ悔等

いつに甲斐あつ死因とさづららぬ伏すも是いつに思の

命あつらんと禱り又一ツは身を後かそく彼所へ遣んこも

すべく養生の看病の善悪によるとりびそく行くまを勸りも

あつ併母が非命のなすも皆照行が故りま彼いすも

ら父母の仇も只よく姓名を保り志と固して仇を報へ

三言士太郎に言傳を眼らるる浅間が首とらん又小雲が

往方終にます孫が生立をも見ずして死する夏後世の障き

かろつべくろろえい母が後のまをの嘗おるすひそくに脱出て

中山へ起さるり一日もたにわく大なる不孝ならんく

と書くまの様子いつくうち泣くとて今朝も元の奴隷がそのまを

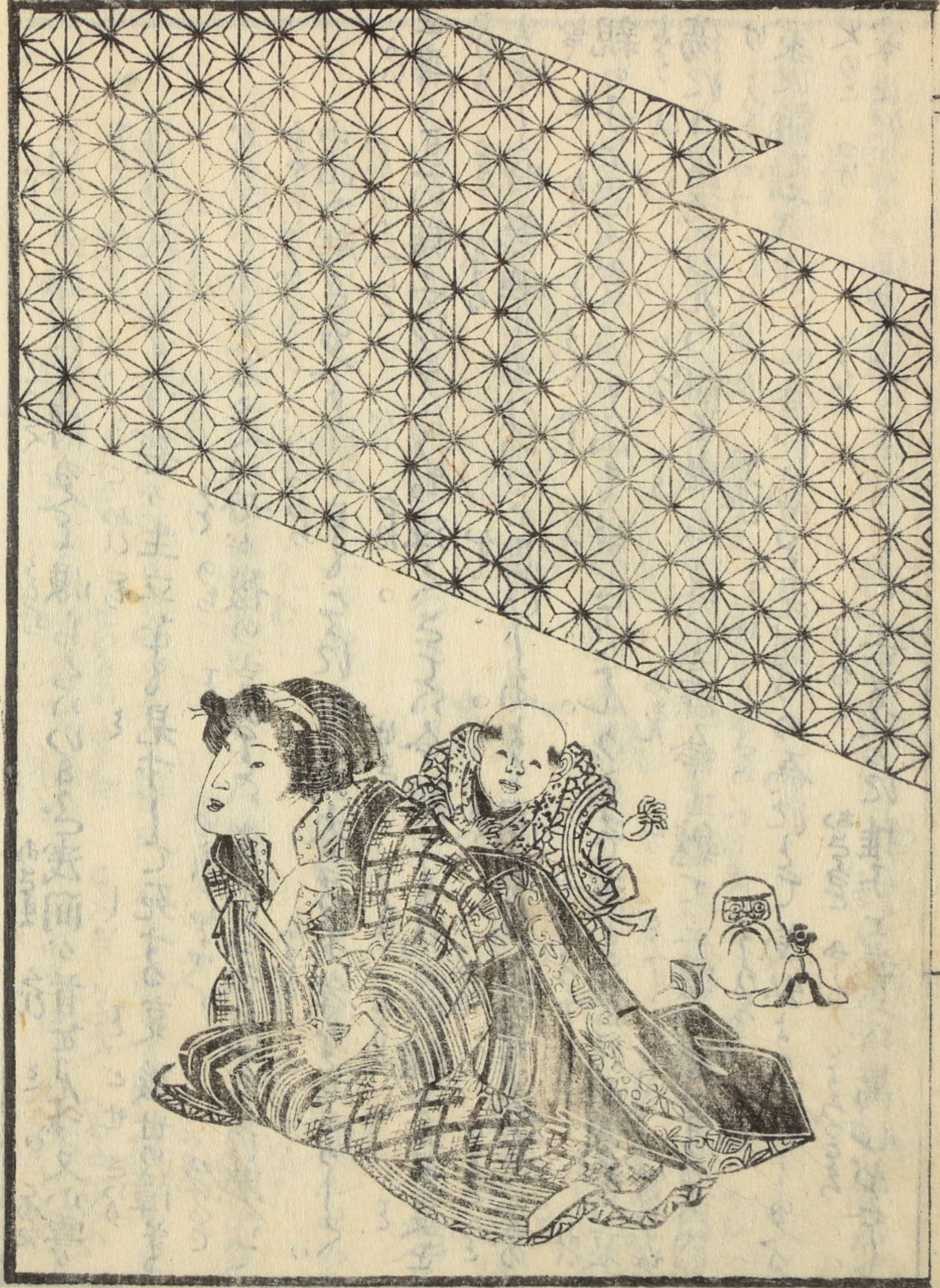
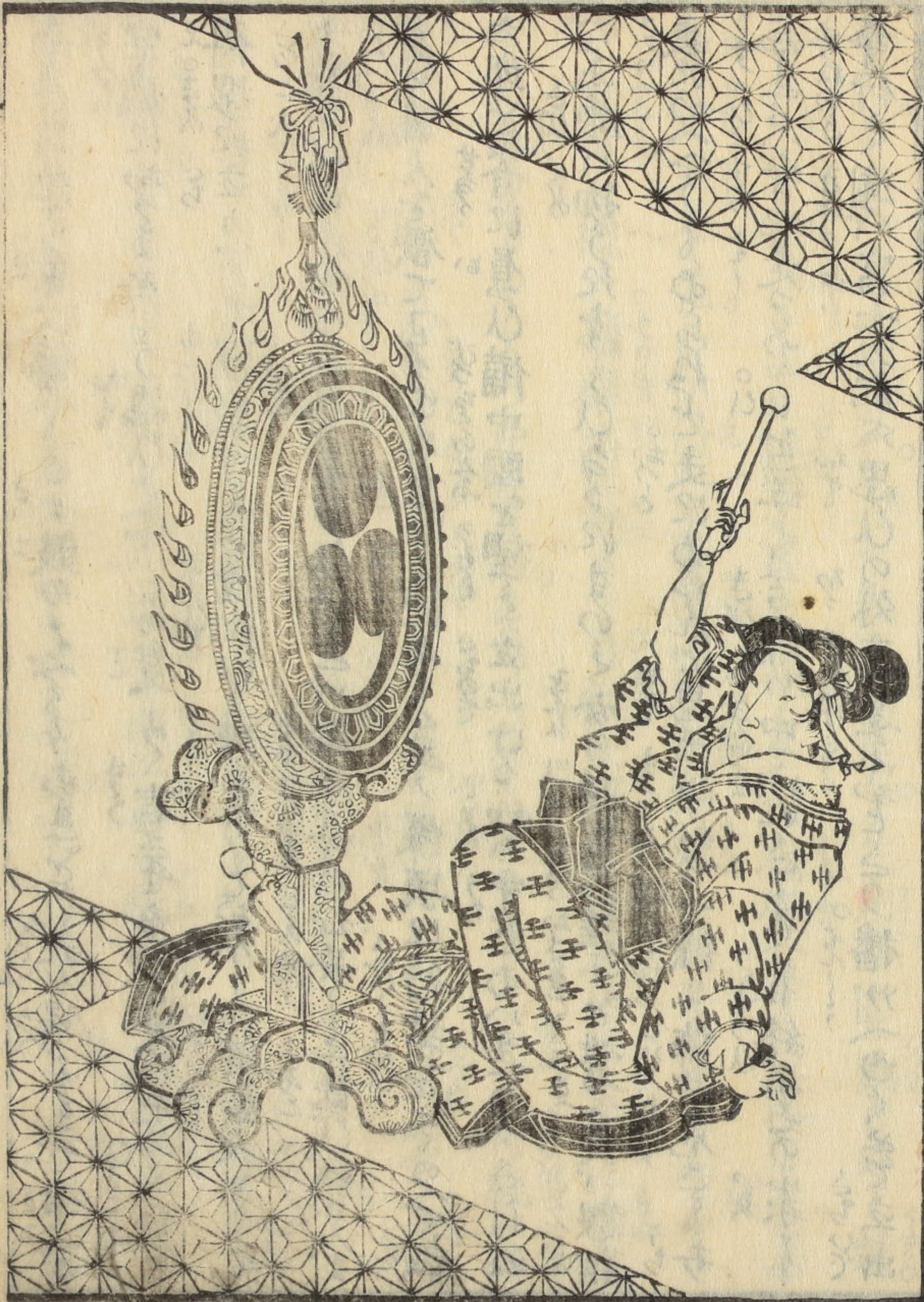
告來一時熟睡しひつと思ひあよく聞きてあせし寔に人の

親の子と思ふ夏海も山も争くへんくまを深き慈にあつら哀

傷に日を送らん却て孝をすくと深念く聽て三雲が死せしを大内

家に訴てその夜一心寺に葬り見送りの為にとて美弘より來り

家臣に告ていかり母をうつく吾身一ツに推子を養へる萬むがそ



七三にのろく家に傳へる大鼓のなをうがあまどが夫が帰るまで相づの
 宝藏にちりまりう思ひまへるこの夏よく言をせぬといふその人ゆと
 得塚に立ちて演説するに美弘いと理なりとわがし結朝人として
 太鼓と城中にちり入るをひけは接子今ひ女と歡び雙言人よ
 夏漏んを厭て日かゆく方と人にあはさず俄頃に行装とせめて敵
 太郎と脊に負ひ備中國と望ましく立出ける心の中をいれらるるさしぬ
 だふ旅の物うたなうひうたのもの女に孤客に稚子を携ふれば艱難
 更にいづうもわらねどまにあんと思ひ誠心の一條は怖さ危さあ
 忘る只管に走つて日を経る吉備の中山にくだり着終ふその家より
 尋行と聞か富士太郎の思ひの外病速ふをこころ播州へゆくまで立出

たまにうらにわさすとみまがうまけはどり死せしと偽るあまど疑
 てよく向究るあまどく詭るあまどささる播磨へうらんとてま
 元の路へ立ちたるたれひ得ぬ夏の遺憾て来し時うら足もすますから
 舟の船坂と徑と播磨路に到り一日敵太郎痘瘡を病て全身に物う
 へら出けるがゆとうらあまればさるぐとら入すうて行と行程に播
 磨とのと聞つて夫の所在も定らるるす只あままでと索あま一日
 室津の比る城山の麓に木とまらる楠あるを見とまび樹下に憩ひ
 ひらめる石の上に落葉うたあまゆと敵太郎をおろしうそ畏飯より出
 て夕餐食あとするに敵太郎の逢向の岨に菊の花の色濃咲後まてを
 見とあまとらんまびうらまらうまびひより彼所を歩と行とく

ちと一伎の折り後方を見えたるに今居たる石の上に月影の見え
 驚き怪しく走り去りて呼ぶとよめりけり
 廿三元東此地方ハ羊腸の山路と云はれ前後も見えざる徑又
 行くすぢもあやむべりゆり行つらんと只顧疑ひ迷ひて彼
 ハ遠く隔む花も折る間を彼より走り去るにわづらひ狼の
 銜く高峯や登りけし鷲てふ鳥の久し相く碧空や翔けんと
 みる思ひゆらむと浅きとぞ乱れ物さへ生きたる索吟
 呻やど初冬の晷傾き中を夜行先も暗けし來るまじく行
 ずもあらず完栗川の西よりける黒崎の浦に出るのと夜も子の刺
 ささく身疲は勢ひ既に竭ぬまじく今ひとしと思ひて江に繫す

海人の小舟に乗りとうり船前ちうわめ出又潜然と泣けり且く
 のみ身も吾身と薄命なるものありと幼少ては落人となりて
 紀の山里に世を潜び和泉にゆく野人の為に奪ひ去られ姉女老曾が
 生死をさす又墨江にゆく男中と村主兵助を浅間に撃ち入る亦
 姑世を去るとひその遺言を空しくせしと遙く索來しものを夫の
 環會するを見も往方なくなりて何を便に存生ん婆娑の苦難を
 脱とて死出の旅路に赴きゆく憂は勝らぬ弥陀佛の念する
 声も涙のいと口にももささる遂に水中に投入する折も船底より
 一個の旅人猛然とあつら出せし様子恨せるといひもあはれ雷
 ると見えはま富士太郎なりあはれと驚かると驚馬つ又うれ

縊り付よくと泣きもあはせたり。富士太郎も眼をまわして泣きあはせり。
 吉備の中山あまき死ねてうらたに神仏のまじり捨てて。忽ち病
 むすむけむらこのまはあはせにあらせまめり。思ひのうら便宜のけ
 るに黙止うあつるにいとあつるにうらあはせり。今又ひやうぢらあ
 を聞に母あはかろりあはせり。あひ見の往方あまきとや。そく縁
 由を聞んわろ。あひあまきと問はる。い同ふらりもあはせり。強顔さあ頭も
 擡す。母の遺言うら見の夏波の間。物ごとくまはせり。まはせり。聞も読ら
 紅涙泉の涌がごとく熱傷あはせり。死んせせ。あまきと問はる。胸を捺
 母は横死。あまきと問はる。あまきと問はる。往方あまきと問はる。夏禰神の野為とあまき
 且ご子いふ不儲る夏もあはせり。只歎く。死んせせ。あまきと問はる。彼も夏も

杖を討ん。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 多の士卒を殺く。室津にのまら。雙言人も彼野あまきと問はる。あまきと問はる。
 衆ら。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 扱と。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 も明のころあまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 もあ復。又照行と見るか。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 あ碎。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 ままの一言に接子。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 彼多田の神託に死ん。あまきと問はる。あまきと問はる。あまきと問はる。
 三國一夜物語卷之六 終



